

平成19年度と平成20年度におけるワクチン類の薬価について

	平成19年度 薬価（円）	平成20年度 薬価（円）	変更額 （円）	変更率
沈降破傷風トキソイドキット （0.5ml）	410～434	404～426	▲6～▲8	▲1.5%～▲1.8%
沈降破傷風トキソイド （10ml）	1,198	1,198	0	0
HBワクチン	2,647	2,566	▲81	▲3.1%
狂犬病ワクチン	4,893	9,491	+4,598	+94.0%
ハブ抗毒素	43,046	73,909	+30,863	+71.7%
マムシ抗毒素	17,982	27,170	+9,188	+51.1%
ガスえそ抗毒素	121,378	183,067	+61,689	+50.8%
ボツリヌス抗毒素（E型）	94,198	159,982	+65,784	+70.0%
ボツリヌス抗毒素（多型）	356,327	640,661	+284,334	+80.0%

平成19年度 インフルエンザワクチン需給状況 (3月28日速報)

社団法人 細菌製剤協会

- 需要検討会における平成19年度需要は1,940万本～2,080万本程度と予測されたところ、製造メーカーの製造量は2,550万本であった。
- 平成19年度の流通状況速報(平成20年3月28日現在)では、医療機関納入は2,388万本、医療機関使用は2,258万本と報告されている。
- ワクチン接種が順調に進んだことが後押しとなり、使用は製造の88.5%であった。
- ワクチン製造メーカーの製造量は平成18年2,518万本、19年2,550万本と十分な製造・供給能力が確保できるまでになり、今シーズンの品薄感はなかった。
- 今後、調査、把握、分析し、平成20年度のインフルエンザワクチン需要予測の参考としたい。

平成19年度の予測と実績

(単位 万本)

	予測最大量	予測最小量
	2,080	1,940
製造量	医療機関納入	医療機関使用
2,550	2,388	2,258

(参考)

一昨年(平成18年)の予測と実績

(単位 万本)

	予測最大量	予測最小量
	2,280	2,150
製造量	医療機関納入	医療機関使用
2,518	2,034	1,877

3月12日に欧州製薬団体連合会(EFPIA)は以下の3つのポジションペーパーを公表した。

1) ワクチンに対する日本と海外との格差について(ワクチン・ギャップ)

日本は世界で2番目の経済的な先進国であるにもかかわらず欧米に比べると使えるワクチンの種類が少ない。たとえば、乳幼児用肺炎球菌、ロタウイルス、ヒトパピローマウイルスなどの革新的なワクチンや、IPV-DTP(不活化ポリオージフテリア・破傷風・百日咳)などの混合ワクチンは使えない。日本国民に有用なワクチンを届けるためにワクチン・ギャップの解消が望まれる。

2) 日本のワクチンに関する臨床、薬事及び技術面におけるのハーモナイゼーション
EFPIAは次の2つの障壁について懸念を示している。

- 世界的に使用されているワクチンが、日本で承認されるための要件を明確にした臨床開発および薬事ガイドラインがない
- 日本のワクチン技術規格と、欧米及びWHOで広く採用されている規格との間に違いがある

これらの課題が、高品質のワクチンを世界市場に提供し得る日本のワクチン産業の発展にとって、障壁となっている。これは、海外の既存ワクチンで予防可能な感染症の脅威から日本国民を守るために、海外から日本にワクチンを輸入する上での障壁ともなっている。日本政府は、欧米やWHOと協調したワクチンの臨床開発、薬事、技術ガイドライン及び規格を採用し、日本製ワクチンの世界市場への輸出と、現在の日本のワクチン製品範囲を補完してワクチンで予防可能な疾病から日本国民を守るために、海外のワクチンの導入を促進するべきである。

3) 日本における資金調達必要性

任意接種のワクチンに関して日本のワクチン資金調達方法には以下の問題点がある。

- 低いワクチン接種率による、不十分な公衆衛生政策
- 消費者は、費用が個人負担である＝「重要性が低い」と受け取る
- ワクチン接種費用の個人負担により生じる、貧富の差による医療格差
- 費用個人負担による、ワクチンメーカーの対新規ワクチン投資意欲の低下

これらの課題を克服するために公的保険での償還などの新たな資金調達のしくみの構築が望まれる。

ポジションペーパーについてのお問い合わせ先:

欧州製薬団体連合会(EFPIA Japan)

ワクチン委員会

〒151-8566

東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-6-15

グラクソ・スミスクライン株式会社

電話番号: 03-5786-5355